松浦ケントの恋愛哲学

matsuura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
松浦ケントの恋愛哲学

【Ｎコード】
Ｎ７００９Ｕ

【作者名】
ｍａｔｓｕｕｒａ

【あらすじ】
恋愛における偏食。
この偏食の定義を松浦ケントの恋愛に置き換え、「今昔物語」と「偏食」を比較し、偏食のミステリーを探る。
ロケーションは、日本、シンガポール、中国だ。

恋愛において、偏食しないということは、各々の韓流ドラマを無数に育む。

恋愛には、「する、しない」に関わり無く「偏食」が付きものだ。
「偏食をする、しないという行為をＴＰＯで使い分けることができれば、各々の魅力を倍増させてくれる」
「偏食するとしないとでは、恋愛の経験数も変わってくる」
「だが、雑食になれというのではない」
「偏食をしないこと、それが、あなただけの韓流ドラマを無数に育むための要素のひとつになる」
「しかし、恋愛至上主義者が増えるとは限らない」と、ケントは考えている。
ここでの偏食の定義は、「偏食とは食べ物の好き嫌いが激しく、特定のものしか食べないこと」
この偏食の定義を「松浦ケントの恋愛」に置き換えて、偏食のミステリーを立証、検証してみたい。
数多い松浦ケントの恋愛については、別の機会を設けて紹介したい。
（今回の話は、実家の近所で薬局を経営されている方から提供していただきました）

1．恋愛で「偏食しない」を実践している男
「おまえは、普通の人の三倍の人生を生きて来た」と、突然彼の母が言った。
「母は、ほんとうに自分の子供のことをよく見ているな」と思った。
しかし、母と子の二人が描いた「普通の人の三倍の人生」の意味は、異なっていた。
彼の友達は、「おまえは、おれの六倍の人生を生きて来た」と、

彼に言った。
　彼と友達の描いた「おれの六倍の人生を生きて来た」は、同じ人生を意味していた。
　彼は、一年のほとんどをアジアで暮らしている。一年に1回か2回しか実家へ帰って来ない。
　彼は美男子でもない。
　甘い話ができるタイプでもない。
「偏食しないタイプ」なのだ。
　チャイニーズの男は、外へ出ると口から出まかせ、甘いチョコレートのような会話を連発する。
「彼は甘い話ができないから、アジアで人気がある」
「アジアの女性の目から見て、彼は実直な人に見える」
「彼が、ほんとうに、韓流ドラマを地で行っているような様相を呈し、一方では、手当たり次第という印象を持った」
「アジアで、偏食しないことを実践して来た彼の話には、韓流ドラマのような脚色は無い」
「しかし、彼の話のなかにロマンスを感じた」
「それも、男なら誰でも肖(あやか)りたくなるような、清純で理想的な恋愛だ」と、友達は恥ずかしそうに言った。
「偏食をしない」ことは、あなただけの韓流ドラマだけでなく、ロマンスをも育むのだ。

2．偏食はフレキシブル

　彼が新入社員の頃、大阪勤務だった。
「グループで飲みに行くと、必ずと言ってよいほど、よく持てる男がいる」
「彼の場合も、そういうタイプらしい」
「彼は話題豊富だが、グループ内ではあまり話をしない」
「話をしないから、余計にグループ内で目立つのかもしれない」

南の三津寺筋に「公楽」いう割烹があった。そこで、彼は、よく食事をした。
その店の主人が言った。
「あなたほど、たくさんの女性をこの店に連れて来たお客さんはいない」
しかし、「公楽」の主人は、彼の人気の秘密が何処にあるのか理解できなかった。
「このお店の料理が美味しいから、たくさんの女性を連れてくることが出来る」
「それに、美味しい料理が私の偏食を治してくれる」と、彼はその店の主人に言った。
恋愛に於ける偏食は、フレキシブルなのだ。
偏食をする、しないで、人を寡黙にしたり、人気者にしたりするのだ。
「美味しい料理は、女性の最高の笑顔を見せてくれる」と、ケントは微笑んだ。

3．ハイアベレージヒッターは、偏食をしない。
近所にあるローソンのオーナーが、彼をテレホン倶楽部に連れて行った。
その倶楽部でも、彼は、ハイアベレージヒッターだった。
「電話で話した女性と、彼が出会う確率は高かった」と、その倶楽部の受付の小母さんも言っていた。
「最後には、その受付の小母さんまで、彼は食べてしまった」
「いまでも、その小母さんから電話でカラオケのお誘いがあるそうだ」と、そのローソンのオーナーが教えてくれた。
そのローソンのオーナーも、「偏食をしない」ようにと色々と努力し
たようだがアベレージは上がらなかった。

4．美食家に、偏食する、しないは付きもの

「どうして、きみはそんなに中国女性に人気があるのだ」と、中国で、ひとりの日本人に尋ねられた。

「偏食をしないことです」と、彼はその日本人に言った。

二週間ほど過ぎて、その日本人と出会った。

「どうしても偏食してしまう。綺麗なもの、美しいもの、おいしそうなものに目が行く」

「偏食しないことの難しさを痛感した」と、その日本人は言った。

その日本人は、「偏食しない」を実行したようだった。

「だったら、偏食できるところへ行けばいい」と、彼が言った。

無理に「偏食しない」を実行するとそのリバウンドが、必ずある。

「苦手な人と一緒に時を過ごさなければならない時は、一緒に食事に行く。その苦手さを吹き飛ばしてくれるぐらい美味しい料理を食べる」と、彼が言う。

そのことを知らない彼の中国の友達は、彼のことを美食家と呼ぶ。

彼と一緒に食事に行くと、必ず、各友達の好みに合った美味しい料理を食べさせてくれるからだった。

「中国では日本以上に、会食は意味を持っている」

「偏食しないで食事ができれば、お互い共通の会食の場を分かち合うことができるのだ」

「しかし、過剰な会食は意味が無い」と、彼は思う。

恋愛における偏食は存在するが、恋愛における美食は存在するのか。

5．「今昔物語」と「偏食する、しない」

「Ｉ　ｍｉｓｓ　ｙｏｕ」「偏食しない」を、教えてくれたのはジュリーだ。

そのジュリーと、7年ぶりに、彼は再会した。
彼女は、美人でスタイルはコカコーラのクラッシクボトルのようで、頭もよく、銀座の倶楽部でも売れっ子だった。
そのジュリーは、様変わりしていた。
彼は、まるで、別人のようなジュリーを見た。
その瞬間、彼の脳裏を「今昔物語」の一篇が掠(かす)めた。
「いくら美人でも、死んでしまえば、骸骨なのだ」
ジュリーの場合、7年の間、フィリピンで苦労をしたのだろう。
東京にいた頃の美人のジュリーの面影は、無かった。
ジュリーは、フィリピーノで東京にフリーランスで出稼ぎに来ていた。
彼女は、敬虔なカトリックだった。
彼の上司が、ジュリーのいる倶楽部へ彼を連れて飲みに行った時に、彼女と出会った。
彼は、その倶楽部へはほとんど行ったことが無かった。
何がきっかけで、彼女と付き合うようになったのか、彼の記憶に無い。
彼はよく持てる男だった。
その男の前に、とてつもない美人のジュリーが現われた。
彼はたちまち彼女に夢中になった。
ジュリーも彼に興味があったらしく、二人は瞬く間に、半同棲のような生活を始めた。
「親戚のいるアメリカへ一緒に行かない」と、ジュリーが彼に言った。
彼は、アメリカへ行くのを躊躇(ためら)った。
「今昔物語」では、美男子で女によく持てる男がいた。
その男の前に、この世のものとは思えない美女が現われた。
その男は、苦心惨憺して、その美女と結婚した。
しかし、可哀そうに、その美しい妻は、結婚して一年も経たないうちに、病を得て死んでしまった。

三月経ち、半年経っても、男はどうしても美しい妻の面影を忘れることができなかった。
ジュリーと別れてから7年、彼女への想いが募って、彼は彼女に会いたい気持ちを抑えきれなくなった。
その時、彼はシンガポールで働いていた。
「今昔物語」では、美しい妻を亡くした男は、どうにもこうにも我慢ができなくなって、ある日妻の墓へ行って、棺おけを掘り起こした。
しかし、男が見たものは美しい妻の顔とは似ても似つかない腐った肉の塊だった。
彼は、彼女のむかしの面影を抱いて、ジュリーとシンガポールで会うことにした。
其の日、シンガポール空港で、彼はそわそわしながら彼女が出口から出てくるのを到着ロビーで待っていた。
飛行機が着き、乗客が降りて来た。
その中に、微笑みながら彼に向かってガラス越しに手を振っている女性がいた。
その女性は白髪が目立ち、少し太り気味だった。
彼の思い描いていたジュリーとは、とても似つかない他人だった。
その女性が彼の目の前に来るまで、彼女がジュリーだと、彼は気がつかなかった。
だが、彼女の大きな輝く瞳と形のよい唇は、むかしのままだった。
彼の目の前にいるジュリーには、東京で一緒に生活をしていた頃のジュリーの面影がなかった。
まるで、別人のようだった。
しかし、ジュリーのやさしくて明るい性格は、東京で一緒に生活をしていた頃のままだった。
「今昔物語」で、その男は、この世の無情を感じて頭を丸めて仏門に入り、一生、仏に仕えて暮らした。
彼も同じく無情を感じた。

しかし、彼は「やさしくて明るいジュリーの性格に救われた」と思った。
この「今昔物語」の話に出てくる男は、仏門に入ることで、この世の無情から救われた。
一週間後、ジュリーはフィリピンへ帰って行った。
「ジュリーと会わなければ良かった」と、後悔した。
「しかし、これが現実だ」
「人生に、様変わりはつきものだ」
「ジュリーと再会したことで、得がたい教訓を得た」と思った。
そのときから、彼は、恋愛において「偏食」をしなくなった。
「今、ジュリーはイタリアで伯母さんと暮らしている」
「彼女は、もう、フィリピンには帰って来ない」
「毎年クリスマスになると、ジュリーからカードが送られてくる」
と、彼が教えてくれた。

6．恋愛至上主義と偏食　彼と旅順の女（ひと）

「彼女は、恋愛至上主義者だ」
「では、彼女にとって恋愛とはなんだろう」と、彼は思った。
「恋愛は、私にとって人生の秘鑰（ひやく、秘密を解く鍵）です」
「恋愛の無い人生は、私には考えられない」
「そして、たとえ、片思いであっても恋愛がすべてなの」と、彼女が言った。
そんな彼女を「旅順の女（ひと）」と、彼は呼んでいる。
「私は、同じ男性と3度結婚した」
「たぶん、性格の不一致によるものか、私の恋愛の情熱が無くなったのが原因なのよ」
彼は、彼女がＩＢＭに勤務している時に知り合った。
彼女は、いまでも学才のある文学好きな少女のようだ。
才媛もあり、今も、ときどき詩を書いて投稿している。

「私は、詩を書くのが好きなの」
「私の主人は、文学に興味が無かったわ」
旅順の女(ひと)は、容姿も端麗で、理知的な香りがする。
彼女は結婚後、恋愛が無くなったからと言って、相手を捨て、他の異性に走ることもなかった。
「たぶん、私は、現実の家庭生活を重視したから、家庭を無視した盲目的な恋愛はできなかったのよ」
「いまでも“　恋愛を人間における最高の価値　”と私は考えているわ」
「しかし、私は結婚後、逆に、恋愛の中に自由と理想を求めたのかも」
「そして、結婚生活から逃避したかったのかも知れないわ」
「結婚生活に対して、私の忍耐力には限界があり、ストレスがたまって苦しかったのよ」
「恋愛と言う観点から見て、偏食する、しないという関係で、私たち二人は相反するようね」と、彼女は言った。
そこに、「相反する彼と彼女が出会うとどうなるのだろう」という疑問が沸いてきた。
言うまでもなく、二人は、磁石のプラスとマイナスのように強く惹かれあった。
「彼には、結婚して以来感じたことのない好い意味でのムードがあるのよ」
「私が悩んでいた時、彼は、私の精神的支柱になったわ」
「紅楼夢も読んでいるけど、彼は、エイリアンのような存在なの」と、彼女は言った。
彼女は、最近、美容整形に通っている。
「美容整形は、貴女に必要無い」と、彼は彼女に言った。
「だけど、美容整形に通うことで、私の新しい恋愛の方向性を見つけたいのよ」
「それと、私の中の何かを主張したいのかもしれない」

「最近、貴女は登山を始めたそうだが」
「何か、乗り越えたいことでもあるのか」と、彼が言った。
「偏食という名の山を乗り越えたいのかもしれないわ」と、彼女は微笑みながら言った。　了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7009u/

松浦ケントの恋愛哲学

2011年7月9日03時25分発行